HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アジア観光とヒンドゥー文化（Ⅰ）A．シュッツのレリヴァンスを視点として
著者	中鉢，令兒
引用	北海商科大学論集，7(1)：60-71
発行日	2018-02

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

 受理日：2018/2/20

アジア観光とヒンドゥー文化（Ⅰ）
A. シュッツのレリヴァンスを視点として
The Hindu culture in the Asian tourism（Ⅰ）
Making Relevance of　A.Schutz　a viewpoint

中鉢　令兒　CHUBACHI　Reiji

要旨

本論文は、2011 年から 2018 年までの 7 度に渡るデザインサベーを基にしている。全体は、2 部構成で、第 1 部では、ヒンドゥー教が今も人々の生活の中心である、カトマンズ盆地を対象地とし、さらにヒンドゥー教が多数を占めるが、イスラム教やジャイナ教、キリスト教の活動が共存する北部インドをサベー対象地として観光資源の視点でまとめた。また現状の事例として、ガルタ、ハルドワールを対象地とした。第 2 部では、ヒンドゥー教を核に仏教、ジャイナ教がともに修業の場を共有する石窟寺院群エローラ、仏教の最高傑作といわれるアジャンタをデザインサベーしインドデカン高原の宗教的視点を報告する。

キーワード：ヒンドゥー教、ネパール、ガルタ、ハルドワール、A.シュッツ

Abstract

This is based on design surveys which conducted 7times since 2011 until 2018.

The paper is largely divided into two parts. The first part targeted the “Kathmandu Basin" where Hinduism is still the center of people's lives. In addition, Northern India where Muslim, Jainism, Christian and Hinduism coexist, though Hinduism accounts for a majority, was researched from the viewpoint of tourism resources. Furthermore, as the current case, we set the target area for Galta and Hardwar.

In the second part, we conducted a design survey on “Ellora Caves” where Hinduism is the core but Buddhism and Jainism even share the place of training and “Ajanta Caves” where is regarded as the best masterpiece of Buddhism, and we made a report of the Deccan Plateau from the religious viewpoint.

Keywords：Hinduism, Nepal, Galta, Hardwar, A. Schtz

 受理日：2018/2/20

1.　はじめに

アジアの生活文化は、東西に長く多様な環境が存在し、その環境が生んだ風土文化である。かつてヨーロッパ文化の少ない影響の東アジアには、水を支配し利活用する東北アジアの治水文化と、水を支配せず自然の摂理と考え水の脅威と恩恵と協調する東南アジアの親水文化に大別される。他方東アジアの近代化に伴って親水文化は、タイ王国の親水文化のアユタヤから治水文化のバンコクへの遷都のように治水文化へ変容した地域もある。言い換えれば、計画経済において予測不可能な水の恩恵を読み込むことの難しさがあり、より確実な計画性は、予測不可能な恩恵を排除するといった結果を生んだ。

また親水文化には、水を基礎としたとした原始宗教が存在する。代表的なものとして、今日も痕跡を留める象徴化されたナーガである。このナーガ信仰を紐解き観光資源を理解するには、学際的知識と文化人類学の蓄積が不可欠で解釈に至るには程遠い。したがって、本稿では、地域的に重層化しているヒンドゥー文化を手掛かりに、東南アジアの観光資源を考察する。もって、この地域の観光資源の解説で、「輪廻の思想によりここに至った」といった意味不明で説明不十分な点（マッキァーネルの指摘の徴表）を改善することを目的とした。しかし紙面の都合で割愛した点も多く、その点は、日本観光研究学会等の発表論文集を参照してほしい。

2.　調査概要

東南アジアのヒンドゥー教文化圏を、3 で解説するようにシュッツの生活世界の構造を基礎概念として、レリヴァンスレベルで区分した。ヒンドゥー文化の色濃く(レリヴァンス)残る地域としてカトマンズ盆地（ネパール)、イスラム教、ジャイナ教、キリスト教、仏教と共存(変形、協調、対立)する北インドとラージャスターン、遺跡として保護され、ヒンドゥー教から派生した仏教のみがわずかに存在するが、ヒンドゥーの生活世界が残るジャワ島、観光政策からヒンドゥー教徒を保護したバリ島を研究対象地域としてデザインサベーをした。本論の調査期間は表 1 である。

表 1　調査時期と概要

	地域	都市	期間	目的	特記事項
ツーリスト STAGE Ⅰ	カトマンズ盆地	カトマンズとその周辺	2016.8.9～8.14	ヒンドゥー教の文化を検証	ヒンドゥー教とチベット仏教が混在
		バクタプル	2016.8.14～8.22	ヒンドゥー教の聖地、生活世界の検証	ヒンドゥー教帰依者の町
ツーリスト STAGEⅡ	北インドとラージャスターン	デリー（本論略）	2016.12.28～12.30 2017.1.6～1.8	現代文化の中心都市でのヒンドゥー文化の検証	イスラム教、ヒンドゥー教、ジャイナ教、の共存。

 受理日：2018/2/20

ツーリスト STAGEⅡ	北インドとラージャスターン	ジャイプルとガルタ	2016.12.30 ～ 2017.1.4	観光地化した都市とリスペクトされた聖地の検証	中心都市の世俗化と隔離された聖地。
		ハルドワール	2017.12.5 ～1.6	ヒンドゥー教の日常の儀式の検証	ヒンドゥー教の７大聖地。巡礼都市。

STAGEⅠ、STAGEⅡの概念は、図１参照

3.　基本概念

3.1.　ヒンドゥー文化圏の観光対象のレリヴァンスの枠組み[1]

ヒンドゥー教の教義は、それから派生した仏教とジャイナ教を含めると、約世界人口の半数近くに影響を与えた。またヒンドゥー教の解りづらさは、欧米型概念との断層が存在することである。東洋文化は、仏教の根源であるので西洋ほど断層はないが、西洋化によって断層は、存在している。ここでは、観光資源の理解を助ける程度にとどめた。クシティ・モオーハン・セーンは、ダルマ（法）と宗教の違い、マンィデラ(寺院)と教会の違いなどを指摘し、特に修行を挙げている。ヒンドゥー文化圏で視られるサドーと言われる解脱を求め、真理を探究する人が欧米文化には理解しがたい点と指摘している。またモーハン・セーンは、ヒンドゥー教の核として、DC8 世紀に確立した『ウパニシャッド』教説をあげている。この教説は、ブラフマン Brahaman（梵＝神）とアートマン Ātman(我＝自己)の一致を説いている。この教義は、哲学者シャンカラ S'ankara(AD700～750)によって不二一元論として昇華した。また、仏教とジャイナ教が、ヒンドゥー教から興ったとき、ヒンドゥー教は、ブラマンに至る道を 3 つの方法を提示した。「知識（ジュニャーナ）による道」「行為(カルマ＝儀式を中心とした)による道」「親愛(バクティ＝信仰を捧げる)の道」である。加えて、DC10 世紀ごろに化身思想が流布バクティ思想の発展が助長された。この発展は、アーチャーリヤ（教師)の代わりにグル(師)の階層を生み、同時に学習の場を森の中ら巡礼地や沐浴場に移し、現在も引き継がれている(写真 16)。

3.2.　生活世界

本論は、観光活動の基礎となる非日常性の対極をなす、生活世界から捉えなおす A.シュッツの視点を用いた。シュッツは、ある地域の共存者たちの共通の解釈の枠組みを「自然的社会」と位置付け、日常世界の「自明性」から日常を分析した哲学者である。こうした生活世界から観光活動を再定義すると D.マキァーネルの観光活動の概念[徴表／視角対象／観光客]　観光活動は、概ね図のように加筆される。即ち観光客が、視角対象を理解するためには、日常世界で生きている普通の人は、必然的に日常生活でのレリヴァンスが可能な受動的理解が必要となる。ここに徴表の問題が生じる。本稿では、受動的理解が不可欠であるヒンドゥー文化遺跡を対象にデザインサベーを実施した。筆者においても、ビンズー文化のレリヴァンスは存在せず、受動的理解と能動的理解を手掛かりに展開した。

 受理日：2018/2/20

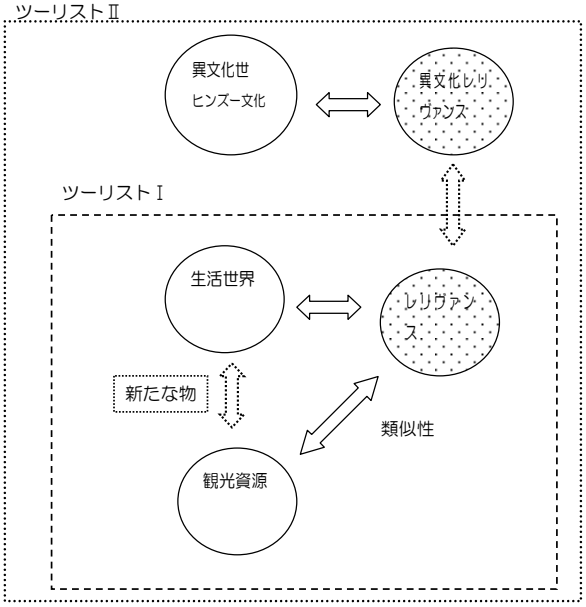

図１　ツーリストの生活世界と異文化のレリヴァンス

4.　ヒンドゥー文化の生活が残るネパール

4.1.　ヒンドゥー教の生活世界：バクタプル

ネパールの首都カトマンズから東に 12 ㎞に位置する、古代ネワール人の居住するカトマンズ盆地で 3 番目に大きな都市である。歴史的には、統一マッラ朝は、1484 年にカトマンズ王国が独立し約 1 世紀後の 1619 年にはパタン王国が独立した。マッラ王朝の宮殿は今も現存し、ネワール族の特徴である木彫の優れた宮殿である。

他の 2 王国との違いは、カトマンズ王国は、スワヤンブナート寺院等のチベット仏教の聖地を持ち、パタンには、ゴールデンテンペルなどの著名な仏教寺院が存在する。しかしバクタプルには、ヒンズー教寺院のみが存在し、ネワール族のヒンドゥー教の生活が体感できる街である。また、ヒンドゥー教の基礎コミュニティのカースト毎のダルマシャーレが 133 か所存在し、今も活用されている。併せて、ガイジャトラの 3 日目に確認したことだが、幾つものコミュニティ毎のナエキバジャが存在し、ヒンドゥー教の主要 3 道の一つ信愛の道（*bhakti*）が継承されていることが認識された。したがって、ヒンドゥーの生活世界を理解するには、バクタブルが適切な場所である。この町は、ヒンドゥー語で「帰依の町」と言われる程信愛の道が存在する町である。この町の最も標高が高い聖なる場所と言われるダルバート広場は、ヒンドゥー世界の 1 日を示している。表 1 は、祭儀日(ガイジャトラ)を除いた 1 週間の調査結果で、住民の行動は、恒常的に定刻でありその時間を表記した。

受理日：2018/2/20

表 2 ヒンドゥー教徒の生活時間

時間	トウマディー広場と２つの寺院の日常（8.14～20）	Hindu-3ways：解説
AM4：50 バイラヴナート寺院		*Bahakti* 朝の御参りが始まる。またお供えを持参する信者もいる。周辺の祠にも花をお供えする。多くの人は、このあと朝食を食べる(聞き取り)。
AM5：30～8：30 トウマディー広場		毎日朝市が開かれる。 お供えの花、生鮮野菜、僅かな日用品が主な内容である。近くの農家の人が大半で殆ど担いでくる。儀式（ガイジャトラ）の日は、半数に減った
AM8：00～8：15 トウマディー広場		*Karma* 神への讃歌（ナェキバジャとは異なる）広場の裏手にある寺院への奉納のため毎日行われていた。
AM10:00　～ PM4:00 トウマディー広場		三々五々、カトマンズに滞在の観光客がトゥマディー広場にやってくる。PM2:00 頃からは、地元の中、高校生が、ニャタポラ寺院で集う。
PM4:00～8：00 バイラヴナート寺院 ダルマジャーレ		*Bahakti＆Karma* 毎日決まった時間にナェキバジャが奉納される。ナェキバジャの楽器は、ナェキン(両面小太鼓)２対、ツシャー（シンバルン）２対で構成される
PM4:00～8：00 バイラヴナート寺院		*Bahakti* 就寝前の御参りが始まる。お供えは殆どなく、ダルマシャーレの前に造られた台に点灯蝋燭を奉納する。

受理日：2018/2/20

バクタブルでの日常世界行動形態の把握は、「生活のヒンドゥー的視点」(S.ラーダークリシュナン、1927)での「重要なのは行為であり信仰ではない。」の指摘[2]のように、より確実なヒンドゥー世界の把握であると言えよう。

4.2.　派生した仏教との関わり：ティミ、スワヤンブナート

カトマンズ盆地の丘に建つスワヤンブナートは、ヒンドゥー教の聖地でもありチベット仏教の聖地でもある。盆地の東側に建つヒンドゥー教の聖地チャング・ナラヤンと対で建つことを配慮すれば、ヒンドゥー教寺院の傾向が強い。ブッタの教えがヒンドゥー教を基礎に置くことから、信仰の互恵関係は理解できる。カトマンズ盆地のルンビニを経てインドに至る巡礼の道にはその傾向が強い。ナガルコットからチャグ・ナラヤンまでの巡礼路(サーベイに寄る)の祠には祈祷旗が飾られており[3]、ヒンドゥー教とチベット仏教の仕切りが曖昧である。

またチベットとインドの交易地バクタプル街道のバクタプルから 11 ㎞離れたティミの中心市街は、ヒンドゥー教寺院とチベット仏教の寺院が併存(図 3)している。バスプールのある繁華街地区には、仏教寺院が混在している。しかし、チベット仏教寺院と言っても、祠的存在である。この街の日常生活世界は、おおむねヒンドゥー教であるお推測される。その理由は、ネパール・ヒンドゥー教のコミュニティを形成しているダルマシャーレが、この街区にも存在し活用され、1 の寺院のダルマシャーレでは、4 人休息・滞在がみられた。またリンガには、調査に訪れた同日の朝と思われる新鮮な供物などの痕跡が多々見られた。

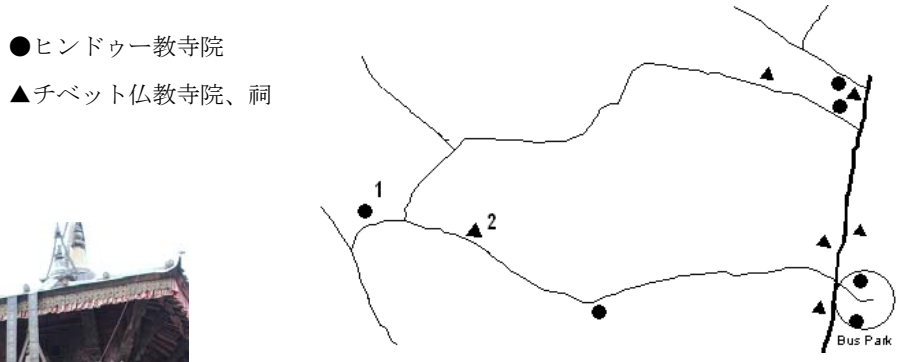

図 3 ティミの市街地

写真 1　ヒンドゥー寺院（位置 1）

写真 2　チベット仏教の祠　(位地 2)

 受理日：2018/2/20

5.　ヒンドゥー文化とほかの宗教が競合するインド

5.1.　ジャイプル

ラージプート地域の首都であるアンベール城から1727年、ジャイ・シング2世によって、ジャイプルに遷都した。ジャイプルは、マハラジャであり、政治家武人で、天文数学者であったジャイ・シン 2 世によって理想的ヒンドゥー都市理念を生かし、計画・建設された都市である[4]と言われている。ジャイプルの旧市街地は、格子状に整備され、中心は、王宮殿と天文台（写真 3）である。またこの街は、ラムシンの治世（1835-1880）の時以来、街全体がピンク・シティの由来となる赤砂岩によって創られ、この象徴的な建物として風の宮殿（写真 4）が有名である。この都市の市街は、周囲を城壁で囲まれた旧市街と城壁の外の新市街とに分かれている。布野先生の住区調査によれば、市街地の「ヒンドゥー寺院と聖祠」[5]の分布図では、今日もヒンドゥー教が基礎宗教であり、イスラム教は、モスクが市街地周辺部に偏在[6]し、近年増えつつある宗教と推測される。

写真 3　ジャンタル・マンタル

写真 4　ワ・マハル(風の宮殿)

5.2.　ジャイプル近郊にあるヒンドゥー教の聖地：ガルタ（Galta）

ガルタは、ジャイプルから約 10km 離れているハニア Galtaji の町で古代のヒンドゥー教巡礼遺跡で今も信仰の対象となっている。ガルタ門から峠に至る道に住まいが張り付いている。峠には、ヒンドゥー教の寺院が有りジャイプルと反対側の狭い裂け目の底に多くの寺院が有る。ジャイ・シン 2 世によって創建された寺院群に向かっていくと、2 つの神聖な沐浴場（kunds）が有り一つは、常時使われている。この寺院には、Galav という名の聖人がここに生涯住んでいて、‘tapasya[7]’を行い、神に祝福されたという伝説がある。

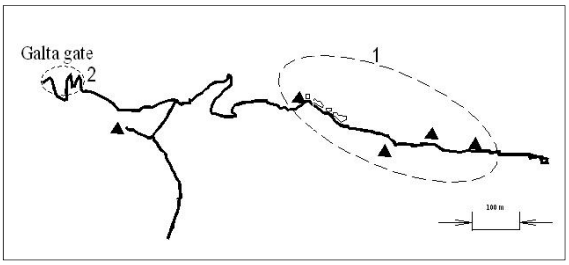

図 4　ガルタ全体図

写真 5　ガルタのゲート門（位置 2）

受理日：2018/2/20

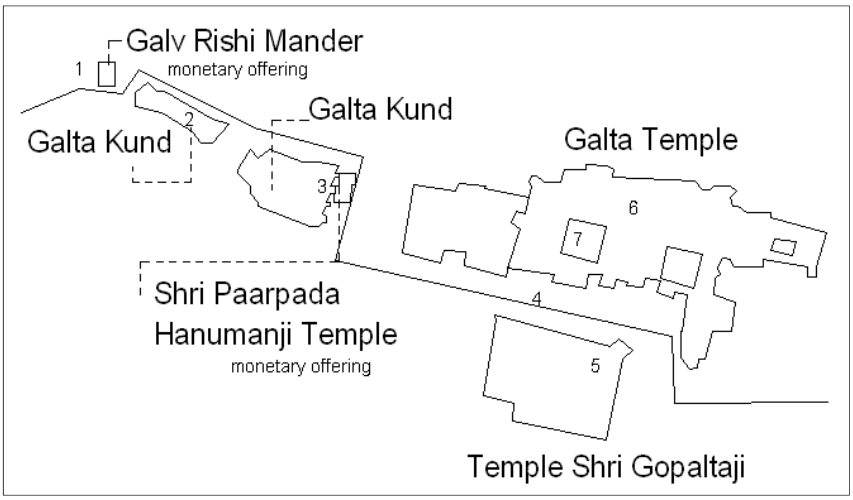

図 5　寺院地区（全体図 1）

写真 6　Galv Rishi Mander（位置 1）

写真 7　Galta Kund(位置 3)

写真 8　Shiri Paapada hanumanji temple

写真 10　Temple Shri Gopaltaji(位置 5)

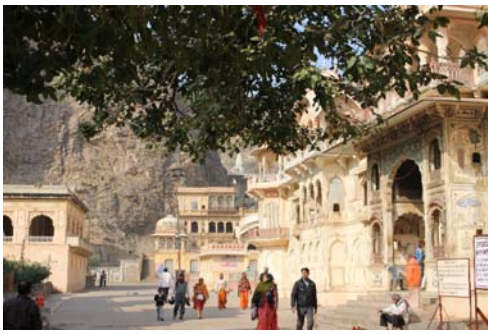

写真 9　寺院群の中央通り(位置 4)

 受理日：2018/2/20

写真 11　Galta Temple(位置 6)

写真 12　聖者の参拝所が中庭を囲んでいる。

従ってこの水で、沐浴すると穢れが流されると信じられ、穢れを流してグルの廟に向かう。ここで修道師から解説を受けるが、師とは言い難く世俗的である。この周辺では、サドーと見られる修行者を数人認識できたが、S.ラーダークリシュナンの指摘のように、宗教とダルマ（法）の違いが、日本文化による寺院のレリヴァンスを不可能にしている。

5.3.　ヒンドゥー教の聖地：ハルドワール

ハルドワール(クンバ市)は、ヒンドゥー教の 7 大聖地の一つで、聖地バナラスより上流でより神に近い水であり透明度も高い。ハルドワールは、巡礼者の町と言っても過言でない。また 12 年に 1 度開かれる牛市や農機具市といったクンバ市(クラブ・メーラー)と云う経済活動も存在する。ここでは、V.ターナーの指摘するように、文化の集約した形として宗教儀式が存在するといった観点から、ガンジス川をめぐる儀式についてサベーと考察を加えた。サベーは、祖先を祭ることから自らの死への心構えを会得するまでの順にサベーした。

【祖先を祭る】夜には、ガンジス川の畔に建つ寺院のカート（図 6（位置 2））でアールティが開かれ、対岸のカートでは、信者と観光客がそれを見学する人波で混雑する。アールティは、祖先の霊を供養するフラワーボートのローソクの火種を讃える儀式で、儀式のされるカート側には、フラワーボートを流す親族が座る。最後に信者は、讃歌を合唱し神秘的ではあるが、行為(*karma*)と信愛(*bhakti*)が一体化する。概ね 1 時間程度行われるが、信者と観光客の集まる対岸のカートでは、寺院のスタッフによる寄付が徴収される。終了後の市街に通じる道は人波であふれ、道路の両面には、仮設の神具店が並ぶ。その商店の商品は、ガンジス川の聖水を持ち帰る大小の容器が中心で、その他の神具も売られている。
【自らを清める】前日祖先を祭った信者は、ガンジス川に設けられたカートで沐浴を個人個人が行う。多くの信者はごく普通に着衣のまま沐浴をしている。このあたりは、ヒマラヤに近く水の流れも急である。数メートル毎に、流されないようにと手持ちが出来る鎖が設置されている。また家族ずれの沐浴者は、初体験の子供たちに手ほどきをしている。

受理日：2018/2/20

ガンジス川では、信仰よりも行為が重要だといった光景が多くみられる。アールティが開かれた両岸に多くの沐浴者が観られる。また、寺院側に設けられたブースでは、ヒンドゥー教の学習がグルによって実施されている。

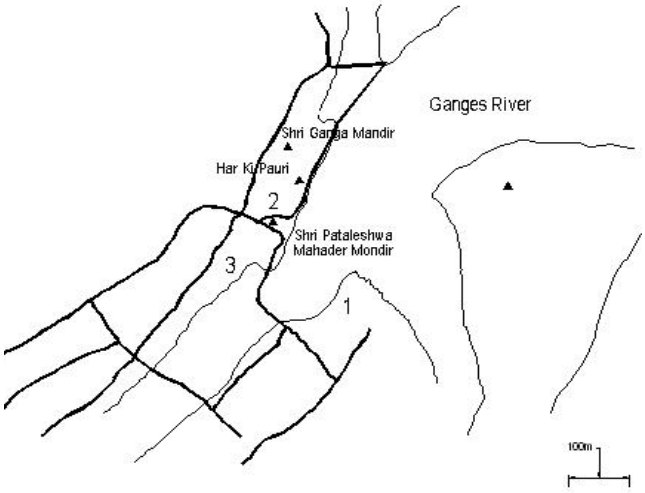

図 6　ハルドワールのガンジス川周辺の位置図

写真 13　アールティ（位置 2）

写真 14　仮設の仏具売場

写真 15　沐浴場のカート風景（鎖 3 箇所）

写真 16　グルに寄る解脱作法の指導
（位置 2,3）

 受理日：2018/2/20

【死への準備】

K.M.セーンのヒンドゥーニスムに依れば、ヒンドゥー教のかつての森の道場は、グルによってその道場は、聖地とその沐浴場で発展した。またバルドゥ・トェ・ドル[8]によると、解脱は、生前の解脱作法の学習によって、瞬間から５日目までの長さの幅があると信じられている。従って沐浴場の一角でグル（師）に寄る解脱の指導の場(写真 16)が行われている。解脱の指導内容は、セーンによれば、ナータ（NÃtha）、ヨーガ（Yoga）、ジャイナ(Jaina)である[9]。簡単にまとめると、ガンジス川への巡礼は、祖先の霊へのリスペクトより自分の死への準備と考えられる。今なおこの習慣が続けられているのは、『信仰より行為が重要である』と言った教義によると推測される。

6.　本部分のまとめ

ここまでの概ねの内容は、以下のようにまとめられる。

① シュッツの生活世界の構造による異文化理解の手法は、D.マキァーネルで捉えられなかった観光資源の本質的理解が可能となる。
② 多用性と寛容性が、この宗教の特徴で多民族の占める割合が多い程この特徴が顕在化している。
③ 信仰より行為が重視されているので、古い遺跡としての施設も、継続的に活用されている。
④ ヒンドゥー教と仏教は相互に影響して変化し、聖地の共有がみられる。
⑤ バルドゥ(解脱思想)から、ヨーガなど幾つかのインド文化を生んだ。
⑥ 穢れは水によって流され、清められる。

第２部の進め方として、デカン高原のヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教の修業の場が同じエリアに存在したエローラ石窟遺跡群、約 100 ㎞離れた地域で仏教の全体像を描き残されているアジャンタ石窟群について調査、考察し、宗教的多様性を持つインドでヒンドゥー生活世界が中心的役割を維持している点からインド文化の特徴を明らかにする点を着地点としたい。

引用文献およびデータ

[1] 本論のヒンドゥー教の理解・検証は、中世インドの研究者、タゴール国際大学学長、K.M.セーンの Hinduism を基に、邦訳本（中川正生）と原著で行った。
[2] S. Radhakrishnan（1927）The Hindu View of Life, Element (2015) p77
[3] 観光研究学会　31 回日本観光学会全国大会学術論文集　25, p 87 参照
[4] 布野修司（2006）曼荼羅都市、京都大学出版会、P111
[5]全上 P300
[6] 全上 P299
[7] Tapasya は、解脱またはスピリチュアルな解放に達するために、修道士（グル）が行います。tapasya の 3 タイプがありますが、①ボディの tapasya、②スピーチの tapasya、③精神の tapasya です。Tapasya はヨーガに非常に密接に関連づけられている。
[8] チベットラマ伝承、（邦訳川崎信定）バルドゥ・トェ・ドル、1989、筑摩書房

受理日：2018/2/20

[9] K.M.Sen(邦約、中川正生)（1961),Hinduism, Penguin Book,P40